

捕虜たちの声なき声に耳を傾けて(9) 2022

英連邦墓地はいつも深い緑と静寂に包まれています。整然と並ぶ1800余りの墓碑の1つ1つに様々な生と死のドラマが秘められています。私たちは、遠い異国で無念の死を遂げた捕虜たちの声なき声を聴き取ろうと長年調査をしてきました。今回はその中から3つの話をご紹介します。

2022.8.6. POW 研究会 田村佳子&笹本妙子

■ Robert Ashton HILL イギリス区 G フロット A 列3 1944.9.27 死亡 (44 歳)



ヒルは香港大学の教授でした。日本軍は1941年12月8日の真珠湾攻撃と同時に香港にも攻め入り、わずか18日間で同地を占領しました。ちょうど12月25日のクリスマスの日でした。香港防衛義勇軍の一員だったヒルは、約11,000人の英軍将兵(英・加・印)と共に捕虜となり、同地の捕虜収容所に収容されました。

1943年1月、彼は「龍田丸」という船で日本に移送され、100人の仲間と共に広島県の因島収容所に到着しました。瀬戸内海に浮かぶこの島には、既にジャワから移送されたイギリス兵が収容されており、彼らと共に島の造船所で働かされました。戦時の増産で繁忙を極めていた造船所は、1人でも多くの労働力を必要としており、捕虜たちは材料の運搬、機械設備の補修、工場や船の清掃などの肉体労働に従事し、朝から晩まで長時間働かねばなりません。食事は貧しく、特に1943年末以降は全国的に食糧事情が悪化したため、ほとんどの捕虜が栄養失調や脚気になりましたが、病気になっても容赦されませんでした。

1944年5月24日、ヒルはひどい風邪で38度6分の熱を出し、病室で手当てを受けました。翌朝、病人全員が所長室の外で点呼を受けた時、ミニーというあだ名の日本人軍属が「お前たちは病気なんかじゃないだろう？」と病人たちをなじり、自分が満足する返事がないと、竹刀で彼らの頭や肩を殴りました。ヒルは宿舎の掃除を命じられ、四つん這いになって床をゴシゴシ拭く仕事をさせられ、その仕事にもミニーに殴り蹴られました。仕事を終えて炊事室に来たとき、ヒルの唇はチアノーゼになって息も絶え絶えでした。捕虜の衛生兵からすぐに病室に行くように言われ、肺炎の治療を受けましたが、その甲斐なく2日後に死亡しました。

捕虜仲間のノーマン・ライトはヒルの思い出をこう語っています。「彼は教養のある人だった。実は彼の奥さんも香港で民間人抑留所に入れられていたんだ。戦後しばらくして、ある会合で彼女に会ったことがあるが、彼女は夫がどのようにして死んだのか全く知らなかった」。44歳だった彼には子供もいたに違いありませんが、その消息を知ることはできませんでした。

■ John U. Friesen カナダ・ニュージーランド区 B フロット C 列 12 1944.2.2 死亡 (37 歳)

フリーゼンの死は捕虜仲間のリンチによるものでした。彼がいたのは京都府宮津市にあった大江山収容所。日本三景で有名な天橋立の近くです。この収容所には、香港で捕虜となったイギリス兵とカナダ兵、フィリピンで捕虜となったアメリカ兵、計600人以上が収容されていました。

捕虜たちは収容所のそばのニッケル工場と、約11キロ離れた大江山ニッケル鉱山で働かされました。鉱山での仕事は重労働で、食べ物は乏しく、捕虜の多くが栄養失調が原因の脚気、ペラグラ、赤痢、神経障害、胃腸障害などに罹り、一夜のうちに髪が白くなってしまった若者もいました。日本人監視員による

暴力もひどく、盗みを働いたり、規則違反をした捕虜には残虐な拷問や懲罰が加えられました。

こうした過度な懲罰を避けるため、捕虜の前任将校ステニングは収容所長と話し合っ、収容所内の規律と懲罰を自分たちで管理する権限を得ました。いわば捕虜による自治組織で、上級の下士官 4 人が運営責任者となりました。捕虜による自治という目的自体は悪くはなく、当初はそれなりに機能していましたが、4 人の下士官は次第に強大な権力を持ち、仲間をリンチする懲罰機関と化して、ステニングの手に負えない存在となっていきました。彼らは「ビッグ・フォー」と呼ばれました。

フリーゼンは盗みを働いたため、ビッグ・フォーによる「裁判」で有罪判決を受けました。収容所の広場で、大勢の捕虜仲間が見守る中、彼は「罰」としてビッグ・フォーから凄まじい暴行を受け、2 時間後に死亡しました。その暴行を誰も止める者がいなかったのです。

この収容所では終戦までに 62 人が死亡し、そのうちフリーゼンを含むカナダ兵 21 人とイギリス兵 31 人が英連邦墓地に眠っています。1984 年、英元捕虜のフランク・エバンスが大江山を再訪した時、彼と鉦山のあった加悦町の人々によって、鉦山跡地に捕虜の慰霊碑が建立されました。



■Halwyn Wilfred Buttsworth オーストラリア区 B フロット D 列 14, 1944.12.18 死亡(34 歳)



バツワースは 1909 年 9 月 12 日タスマニア生まれ。ハルと呼ばれ、サッカー、クリケットやテニスに秀でていました。タスマニア大学を卒業し、シドニーの銀行に勤め、そこで未来の花嫁エラに会いました。1939 年 11 月結婚。転勤に伴い、新居はキャンベラに持ち、二人は活動的な毎日を過ごしました。1941 年 9 月バツワースは入隊し、1942 年 1 月マレー半島に船で進軍しました。その 1 ヶ月後、連合軍は日本軍に降伏、捕虜となったバツワースはチャンギ収容所に収容され、1943 年 3 月タイのターサオ収容所に送られ、泰緬鉄道建設に従事、完成後の 1944 年 7 月シンガポールに戻り、羅津丸にて 1065 名の捕虜と共に日本に移送されました。豪兵は 600 名でした。9 月長崎県香焼の福岡第 2 分所に到着、川南造船での労働に従事しました。香焼のバツワースからエラに届いた同年 12 月 1 日付け捕虜郵便には「肺炎が回復し、元気にしている」とありました。が、彼は実際にはその後の 12 月 18 日に死亡しています。記録によると死因は急性肺炎、しかし、エラはその事実を 1945 年 9 月まで知りませんでした。彼は香焼での死亡捕虜 73 名の一人（米 5、英 21、蘭 41、豪 6）でした。

バツワースは娘のアンが生まれる前に入隊した為、会うことは無く、アンは父親を知らずに育ちました。祖父母はほとんど話さず、母のエラにも辛い記憶でした。でもエラは強く豊かに生き、再婚することも無く、夫を愛し続け、新婚生活を始めたキャンベラの家に住み、1975 年、人生を全うしました。

家族や友人達の僅かな記憶をたどると、アンの父のバツワースはユーモアを絶やさず、優しく強い人のようでした。残された捕虜郵便には、父は常に楽天的で、エラを愛し、決して心配するな、と書いています。戦後、生還したバツワースの友人達がくれた手紙が残っています。「誰からも愛される存在だった。良き兵士で有り、良き友だった」「彼は強い兵士だった、可能な限り、常に仲間を助けようとしていた、それは決して忘れられない」。

※捕虜に関する情報は、POW 研究会 HP をご覧ください。 <http://www.powresearch.jp/jp/index.htm>